カドカワ ノベルズ

昭和五十七年十一月二十五日初版発行
昭和五十八年一月十日四版発行

著者　松本清張（まつもとせいちょう）
発行者　角川春樹

死の発送（しはっそう）

印刷所　暁印刷株式会社
製本所　本間製本株式会社
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三　振替東京三-一九五二〇八
電話東京二六五-七二一一大代表　〒一〇二

Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取替えいたします
0293-770102-0946(0)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

KADOKAWA NOVELS

死の接吻

松本清張

カバー絵／伊藤憲治

死の発送　目次

一章　尾行　11
二章　地下金庫　51
三章　失踪　83
四章　死の託送人　116
五章　馬主と調教師　149

六章　工　作　174
七章　推理と現実　200

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

一章　尾行

1

岡瀬正平が七年の刑を終えて出所した。

世間は彼の名前をまだ忘れていなかった。彼はかつてN省の官吏であった。公金五億円を費消し、当時、国会の問題になったくらい社会を騒がせたものだった。

そのころ二十五歳だった岡瀬正平も、釈放されて出て来たときは三十二歳になっていた。まだ風の寒い早春である。

岡瀬正平は、刑務所の門前まで出迎えに来た叔父の岡瀬栄次郎に伴われ、都内中野区新井薬師の近くにあるその自宅に落ちついた。叔父は雑貨商であった。

数社の新聞記者が岡瀬宅に押しかけて行った。なにしろ、弱冠二十五歳で当時の金で五億円使い込んだのだから、岡瀬正平というと、七年経った今でも、十分にニュース価値があった。

岡瀬正平は笑顔で新聞記者団と会った。当時はまだ童顔だった彼も、今はさすがに顔が痩せ、顎が尖り、老けて見えた。

「あなたの今の心境はどうですか？」

新聞記者は訊いた。

「大へん申しわけないと思っています」

岡瀬正平は頭を下げた。

当時、税金を横領して湯水のように使ったというので、国民的な怒りを買ったものである。そのため、局長が左遷され、課長が辞職している。

「これからどうするつもりですか？」

「当分、ここにいて、叔父の商売の手伝いでもします。それから、ゆっくりと自分の将来を考えていきたいと思います」

「方針はまだ立っていないのですか？」

「なにしろ、いま出所したばかりなので、頭がぼんや

りしています。獄中では、ただ、世間に申しわけなくて、罪の償いをするのに懸命でした」

五億円もの金が二十五歳の青年によってどうして簡単に使い込まれたか。当時は不審がられたものだが、官庁機構の表面几帳面げにみえる裏側のルーズさは、一介の事務官に巨大な職権を与えていた結果であった。上司は事務を下僚に任せっ放しで、帳簿一つ検査するではなかった。そのため、岡瀬正平は三年間に亘ってこれだけの大金を横領できたのである。

岡瀬正平は、その金の半分を女関係に使っていた。あとで調べると、彼の愛人は七人いた。どれも水商売の女であった。彼は秘かに家を建て、そこでは贅沢な調度や洋服を作って暮らしていた。新型の外車も買っていた。その無軌道な生活ぶりが新聞に報道されると、青年たちは自分たちの夢を岡瀬正平が実現していることに思わず羨望したものである。

五億円というと、ちょっと使い切れないように思われる。ところが、岡瀬正平は女たちに大金を使ったばかりでなく、極秘に自分の事業もやっていた。繊維加工会社が一つ、ハム製造会社が一つである。

殊に、彼が最も愛していた女は、銀座一流のクラブのナンバーワンだった雪子であった。彼はこの女に相当注ぎ込んでいた。

しかし、あとで調べたところによると、雪子にはヒモがあって、このヒモに脅迫されていたことが分った。つまり、彼の金使いの荒いことを知った雪子のヒモは、公金費消を感づいて、逆に彼を恐喝していたのである。

二つの事業会社も儲けはなかった。というよりも、役所に知れないように、こっそりとアルバイト式にやっていたので、成功するはずがなかった。この会社に注ぎ込んだ金だけでも六、七千万円を下らない。

しかし、岡瀬正平は、ある場合、賢明であった。彼は役所に出るとき、決して立派な服装はしていなかった。洋服もわざと着古したもので通した。靴も踵の減ったものである。ワイシャツも襟が垢じみ、ネクタイはよれよれだった。要するに、下級役人という扮装を彼は忠実に守っていた。三年間に亘っての使い込みが容易に暴露なかったのは、そのためである。

彼は自宅から出勤するときは、素晴らしい外車だった。だが、その外車も決して役所の近くに着けるということはなく、一キロぐらい離れたところで停めた。彼は車の中で洋服を着替え、靴を穿き替え、運転手をそこから帰したのであった。

しかし、豪奢な生活が身についてくると、どこか、それがちらちらと同僚間に分ってくる。そんなとき、彼は必ずこう言った。田舎の叔父が死んで、その遺産が入ったのだと。なにしろ、叔父は何千町歩という山林をもっていたと吹聴した。――友人は羨望するだけで、少しも彼の犯罪に気づかなかった。

ことがバレて、警視庁では綿密に彼の費消した先を調べた。ここで、雪子をはじめ七人の女に、大そうな金を使っていたことが分ったし、豪奢な彼の生活も泛んだ。二つの事業会社を経営していたことも分った。

しかし、それらの額は合わせてもおよそ四億円だった。残りの一億円が使途不明なのである。

岡瀬正平を訊問すると、彼はその金を日曜ごとの競馬で使ったり、数人の者に高利で貸し付けて焦げつきで取れなくなったといった。馬券の損となると、裏づけがとれない。警視庁では、その貸付先というのを追及したが、ほとんど分らなかった。彼の申し立てによる人物を調べたが、あるいはその地名に該当者がいなかったり、転居して行方不明だったりした。そのことから、岡瀬正平は架空の貸付先を言っているだけで、実は、まだどこかに大金を隠匿しているのではないかという疑いが起こった。

しかし、彼を訊問すると、事実、帳面にも記けていないくらいで、「忘れた」部分が多かった。たとえば、ある女に出した金は三千万円ぐらいでしょう、と言ったが、事実は倍の六千万円だったりした。そんなことから、使途不明の金も、結局、その使いぶりが乱脈すぎて追及できず、警視庁も匙を投げた。

実際、当時、彼を激しく追及したり、また身辺を洗ったりしたのだが、彼の自供以外には何も出てこなかったのだった。

当分、叔父の雑貨屋を手伝って、将来の方針を立てたい、と言う岡瀬正平の顔は、さすがに窶れてはいる

が、往年のふてぶてしさは残っていた。当時、新聞に出ていた彼の表情は、妙に人を食ったところがあったので、現代青年の典型だと言われたくらいである。

ただ、記者団と会ったとき、彼はふと寂しそうに言った。

「わたしは逮捕される二か月前に、母親を亡くしました。当時、わたしは自分の逮捕された姿を母に見られなかったのを喜んでいましたが、今では、こうして出て来ても、母がいないのが一ばん寂しいです」

彼はさすがにしんみりと述懐した。

この談話は、その日の夕刊に出たが、この岡瀬正平の会見には、実は、二、三流紙の記者も混っていたのだった。

底井武八もその一人である。

彼の新聞社は、べつに販売網をもたず、おもに立ち売りの夕刊紙だった。それだけに、煽情的なものを特色にしている。

岡瀬正平が出所すると聞いた底井武八は、編集長の山崎治郎に命じられて、会見記事を取りに行った。しかし、彼の任務は、ただ岡瀬正平に会って話を聞くだけではなかった。

山崎編集長は言った。

「岡瀬正平は、まだ、どこかに大金を匿している。あのとき、警視庁でも摑めなかったのは、彼が巧妙にそれを隠匿しているからだ。あいつは若いが、なかなかしっかりしているようだ。無軌道に女やギャンブルに金を使ったように見せかけているが、あれは早晩、自分が捕まることを覚悟しているやり方だ。最後の用意に、ちゃんと匿し金を作っているに違いない」

編集長は底井武八だけを呼んで言い聞かせた。

「そこでだ。きみは岡瀬正平の行動を毎日探るのだ。奴は、当分、しっぽを出さないだろう。しかし、きみはこれから岡瀬の動静を探るのを専任にやってくれ。取材費はかかっても構わないよ」

むろん、R新聞は戦後に発刊されたものだが、その特色が受けて、かなりな部数を発行している。三流紙ながら社は黒字で、ほくほくものだった。取材費を使っても構わないというのは、そのためである。

底井武八は、他社の記者連と一しょに岡瀬正平に会い、彼の話を書き取って、ひとまず記事をデスクに送った。ここまでは、ほかの新聞社と同じである。違うのは、それから彼が早速、雑貨屋の前の菓子屋の二階の表部屋を借りたことだった。ここに頑張って張り込みをつづけ、岡瀬正平の動静を窺おうというのであった。借りた家は雑貨屋の真ん前だから、逐一、その中に動いている人間の様子が知れる。

底井武八は、自炊道具を一切持ち込んで頑張った。自炊道具といっても、近ごろは電気器具だから、至極簡単である。飯もパンもひとりでに炊けたり焼けたりするから、世話はない。いつでも視線を正面の雑貨屋の店先に向けることができた。

岡瀬正平は釈放された日の翌日から、その言葉どおり、店の手伝いをはじめていた。彼は地味なセーターに、よれよれのズボンをはき、なりふり構わない恰好で、荷造りを解いたり、品物の整理をしたり、値段を叔父に訊いて客に売ったりしていた。

見ていると、彼は小僧のように小まめに立ち働く。これがかつて高級車を乗り回し、七人の女をもって、バーやクラブで豪遊した同じ人間とは思われないくらいだった。

底井武八は、岡瀬正平よりは三つぐらい下だった。彼も当時の新聞を読んで、岡瀬正平の派手な生活を憶えている。いま、毎日、岡瀬の働いている姿を見ると、少々、彼が哀れになってきた。誰でも一生に一度はああいう夢のような生活をしてみたい。人間、落ちぶれた姿を見ていると、たとえ、それが不正だったにしても、妙に、その全盛時代と比較して、同情が湧くものである。

底井武八は、山崎編集長が、なぜ、こうも執拗に岡瀬正平の身辺を探らせているかに、あまり疑問をもたなかった。普通の新聞ではない。特別な話題を売りものにしている性格だから、岡瀬正平が隠匿した大金の行方を突き止めさせ、あっと言わせようという魂胆だ、と単純に解していた。

しかし、底井武八にしても、この仕事は興味のないことではなかった。彼は、これを編集長に命ぜられて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton